

第67回 雲上大御神火祭

令和2年8月8日

5月の春季大祭において「今年は常の年に非ず、特別の年」と御神託があった。

昨年、中国武漢より発した新型コロナウイルスは、瞬く間に世界全土へ感染拡大の一途をたどりつつある。未だ終息の目途も立たず、これまで日本国内でも、経済・政治・文化・教育・スポーツ、あらゆる分野で大きな影響を受け、活動が自粛・縮小・停止を余儀なくされている。宗教界もご多分に漏れず、大小寺社に拘わらず、多くの宗派教派の宗教活動が大きな影響を受けている。

そんな中での本教団の最大行事の一つ、大御神火祭について、社会的情勢を窺いつつその規模や運営に苦慮し、最終的には伝統の灯を絶やすことなく実施の運びとなった。とはいえ、当初予定の奉仕団による実施は3密に抵触する恐れがある為、これを一旦解き、来年に再結成して頂くこととした。今回の奉仕者は、役員・青年部・壮年部を中心に有志による少人数とした。

今年はコロナ禍に対応すべく、規模を縮小し感染予防に最大の対処を講じつつ、御神火祭の本義を損なわないように次の要領で実施した。

- (1) 御山での雲上御神火祭は、御嶽山七合目、田の原の遥拝所で実施する。8月8日午前1時、管長を斎主とし祭員2名で、108本の斎木を焚き上げ祈願祈禱を斎行。その浄火を採火して木曾本宮に降して大御神火祭を実施する。
- (2) 木曾本宮においては、例年通り斎庭に三つの斎木壇をしつらえ、浄火によって焚き上げ、世界平和・国運隆盛・教内発展・心願成就に加え、御嶽山噴火の犠牲者のご冥福と地元の復興発展、加えて今年の難題であるコロナ禍の終息・疫病退散、等々の祈願祈禱を行う。
- (3) これまで大御神火祭は、夜の8時開祭であったが、今年は奉仕者や参拝者のコロナ禍対策として、昼間・正午の開祭とする。
- (4) 来賓の参拝、全国教師信徒の参拝は、近距離あるいは少人数での参拝をお願いし、焚上祭に先立つ本殿祭場では、3密を避けての配席、祭典次第進行に配慮する。

概ね、以上の要領で実施する運びとなった。7日の斎木積み上げは、例年であれば炎天下での作業で熱中症を恐れながらの作業であるが、今年は曇り空で気温も高くなく、作業は順調に運んだ。夜中の田の原での雲上御神火祭も例年は寒さや時には風雨で困難をきたすこともあるが、今年は、月夜の星空の下、風もなく寒さもなく、落ち着いて御神火祭の焚き上げを実施できた。

御神火祭史上、初めて真っ昼間の開祭で、いろいろ懸念することもあったが、実施してみると心配なく順調に運ぶことができた。炎天下でなかったこともご神助であった。

本殿祭は、30名ほどの来賓をお迎えし、関東甲信越から九州までの参拝者が参席する中、8日正午を期して、典儀の浅井宣幸壮年部長の進行により進められた。本殿入口に20数名の先達による法螺貝の高鳴る音に迎えられ、祭員の参進昇殿となった。管長を斎主とし、副斎主に猪野恵作代議員会議長（静岡・富士神誠教会長）、祭員に猪野直希神事委員、安井運樹神事委員が奉仕した。

修祓、祝詞奏上、玉串奉奠、御真言斉唱と進み、田の原御神火祭の浄火を本殿より斎庭に移し、焚上祭の開始。修祓の儀、浄火を採火し3本の大松明に移して、それぞれ3つの斎木壇に点火。斎主による神剣秘法が行われ、いよいよ数十万本の斎木が燃え上がり、斎木壇の火煙の中から炎龍・蛟龍・蜃龍が昇龍となって姿を現す。大祓の詞を斉唱する中、参拝者は赤幣を持って斎木壇の周囲を回周し、管長以下役員の加持を受けていた。

大御神火祭も終焉を迎え、副斎主の挨拶を以って終了した。

「今年は特別の年」コロナ禍にあって、特別の大御神火祭を無事に斎行し、特別の神恩報謝による大きなご神威が木曾の地より全世界に発せられた「特別の年」となった。



御嶽山七合目 田の原祭場



祭員参進



修祓の儀



斎主祝詞奏上



斎主祝詞奏上



御神楽奉舞



玉串拝礼



管長殿御教話



御神火渡御



斎庭にての神事



御神火点火





神剣秘法



燃え上がる齋木



祈願齋木の焚上げ



管長殿による齋木祈願



火煙の中から炎龍・蛟龍・蜃龍が昇龍となって姿を現す

昼間に「麓の祭典」

御嶽教の大御神火祭

縮小も「特別な神恩報謝」

御嶽教(大本庁＝奈良市)は8日、長野県の御嶽山の山上と山麓で第67回大御神火祭を斎行し、世界平和・国運隆盛・噴火犠牲者冥福と地元復興、併せてコロナ禍終息を祈願した。麓の祭典を初めて昼間に実施。例年は関係者300人が奉仕参列するが、今年は100人ほどに規模を縮小した。噴火前は山頂で実施していた雲上御神火祭を、近年は未明に登山口の「田の原祭場」(同県王滝村)で行い、その神火を奉還して午後8時から麓の御嶽山木曾本宮(同県木曾町)で、来賓と全国の先達・信者が参列し本殿祭を斎行した後、夜間の中で巨大な齋木壇を焚き上げていた。一般からも大勢集まりにぎわう行事として地元で定着している。

しかし今年は「3密」回避のため、担当教区・担当教会による奉仕をやめて教団役員らを中心準備を進めた。奉仕者・来賓・参列者を少数に絞った上、宿泊を避けるため麓の祭典を夜間から昼間に変更した。

8日午前1時、井上慶山管長と役員2人により田の原祭場で108本の齋木を焚き上げ、浄火を採火。正午の本殿祭はコロナ対策を取りつつ来賓30人を迎えて斎行した。



8日午前1時すぎ、御嶽山の「田の原祭場」で雲上御神火祭を斎行する井上管長

続いて本殿前の齋庭に、例年通り組んだ三つの齋木壇に浄火で点火。管長が神剣秘法を行うと、齋木壇から龍のように火炎と煙が上がり、種々の作法が行われた。

井上管長は「情勢をうかがいつつも最終的には伝統の灯を絶やさないため実施した。5月の春季大祭で『今年は常の年に非ず、特別な年』とのご神託があったが、特別の大祭と特別の神恩報謝による大きなご神威を木曾の地より全世界に発することができ『特別な年』となった」と語った。

(武田智彦)